

インタビュー法と参与観察法を用いた 日本語教育研究の三つの事例

岩崎弥生*1 今井美登里*2 吉田麻子*3

要旨

本稿の目的は、三人の日本語教師が行った調査・研究の過程と内容を、事例を通して報告することである。三つの事例には、教育の場を出発点としていること、教室の外に目を向けて学習者や学習者を取り巻く問題を社会的コンテキストの中で見ようとしたこと、調査方法としてインタビュー法と参与観察法を用いたことの三つの共通した特徴があった。

事例1では、外国人宣教師を対象としたインタビュー調査と教会の日曜礼拝での参与観察を仮説生成の過程に焦点をあてて報告する。事例2では、公立小・中学校の日本語補習現場での調査方法の模索について報告する。事例3では、海外で行った、インフォーマントが多様な調査の概要を述べ調査の利点がデータ分析に与えた制約を報告する。これらの調査・研究は、出発点である教育の場への貢献を目指している。

キーワード：フィールドワーク 参与観察 非指示的インタビュー法 ラポール

1. はじめに

本稿の目的は、日本語教育の現場にかかわる三人の教師が行った調査・研究の過程と内容を三つの事例を通して報告することである。

実際の教育の場で学習者と接している教師は、その教育活動の中で日本語そのもの、教え方、また学習者などに関して様々な問題意識を持つようになる。そして、教室の中の学習者を対象とした調査や研究にその答えが見いだせない場合、教室の外での学習者を対象として調査・研究をする必要があると判断する。ここで紹介する三つの事例は、学習者や学習者を取り巻く現象をインタビュー法、参与観察法を用いて社会的コンテキストの中で捉えようとしたものである。

2. 教師が行った日本語教育研究

本章では、三人の日本語教師が行った日本語教育研究の特徴をまとめ、その研究のプロセスを紹介する。

2.1 三つの事例に共通する研究の特徴

ここで報告する事例には、以下のような共通する三つの特徴があった。

第一の特徴は、教育の場を出発点としていることである。三人の教師は教育活動の中で感じた疑問を同僚に相談したり書物を調べたりすることで解決しようと試みた。そして、その疑問に答えるために研究を始めた。第二の特徴は、その疑問に答えるには教室内の学習者だけを対象とする調査や研究では不十分であると判断して教室の外に目を向けたことである。すなわち、この三つの研究は、学習者を中心にすえてはいるが、教室の外の学習者や学習者を取り巻く問題を、社会的コンテキストの中でありのままに捉えようとしている。このような姿勢で行われたために、調査法としては、インタビュー法と参与観察法が用いられた。これが第三の特徴である。

次にこの研究を行うに際して用いられた二つの調査方法について述べる。

2.2 インタビュー法と参与観察法

三つの事例では、調査の対象者は、外国人宣教師、日本語補習を受ける児童・生徒、海外で催された日本語スピーチコンテストに関わった教師・学習者・審査員とそれぞれ異なるが、調査法としては、インタビュー法と参与観察法の二つの質的調査法¹⁾が採られた。

インタビュー法は、非指示的インタビュー法が用いられた。これは、調査者が調査の対象者の反応を見ながら自由に質問をして回答を得る方法である。参与観察法は、主に人類学や社会学で用いられる方法で、調べようとする事象が生起しているフィールドで、調査者がフィールドの一員として活動に参加しながら観察を行う方法である。すなわち、調査者は、このようなフィールドワークを行う時、参与者と観察者の二重の役割を持つことになる。観察者のフィールドへの参与の深さにより、完全な参与者、積極的な参与者、消極的な参加者、観察者役割のみの4つのタイプがある(箕浦 1999)。調査者は、観察や自然な会話の流れで行うインフォーマルなインタビューなどにより、対象者となるインフォーマントの行為や言葉を社会的な文脈の中でありのままに捉えようとする。これを可能にするのは、インフォーマントとの友好的な人間関係、すなわちラポールである。このラポールの構築はフィールドワークにおいて最も重要な手続きの一つになる。三つの事例では、学習者を取り巻くフィールドに教師である調査者が入りフィールドワークを行うという点から、調査者とフィールドの間に緊密な関係が見られた。

2.3 研究のプロセス

図1は、三人の教師がたどった、インタビュー法と参与観察法を用いた日本語

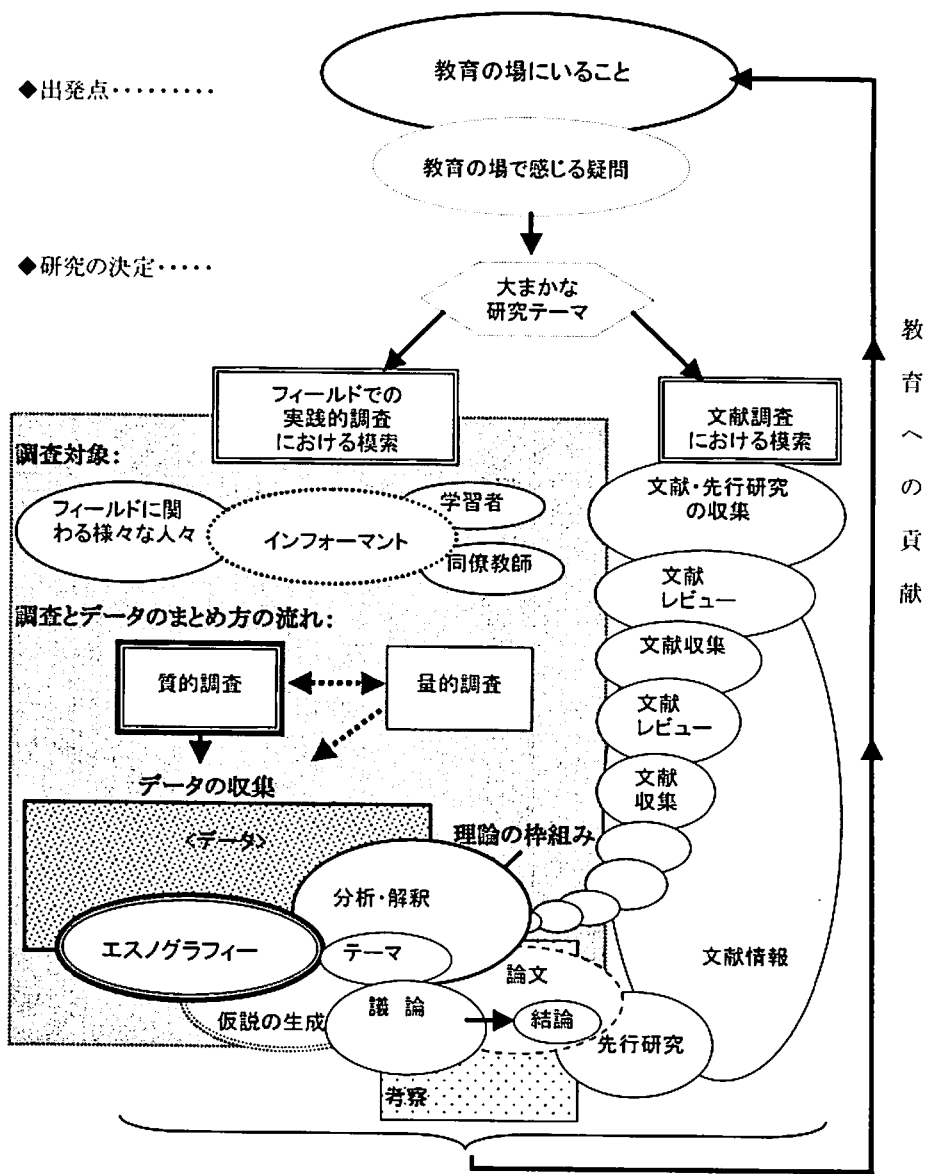


図1 三人の日本語教師がたどった研究のプロセス

教育研究のプロセスを示したものである。まず、教育の場で感じた疑問に答えるための大まかな研究テーマが設定された。調査は、二つの活動を並行して行った。一つは文献調査活動であり、もう一つはフィールドで実践する調査活動である。この二つの間には、つねに相互作用が生じている。

文献調査では、大まかな研究テーマに関わる文献を、タイトルやキーワードで幅広く検索し、読み進める。研究が進みテーマが明確になるにつれて、読む文献の幅は狭く、内容は深くなる。最終的には、1) データを分析・解釈する理論の枠組み、2) 考察で扱う先行研究、3) 参考文献、として議論を支える。

一方、フィールドでの調査活動では、インフォーマント、すなわち、学習者、同僚教師、学習者や日本語教育に関わる様々な人々の行為や言葉、そして、フィールドそのものを観察する。観察の中で大まかな研究テーマは研究の問いへと絞り込まれていく。そして、観察の記述やインフォーマルなインタビューで得られたデータを分析・解釈していくことで、仮説が生成されていく。これらはフィールドワークの報告書であるエスノグラフィーとしてまとめられる。

以上のようなプロセスを取って行われた三つの事例を以下で紹介する。

3. インタビュー法と参与観察法を用いた質的調査の三つの研究事例

3.1 事例1：宣教師を対象とした調査の事例（今井）

3.1.1 出発点

調査者は、外国人宣教師²⁾ に日本語を教えている教師である。教室で教える中で外国人宣教師が実際の伝道において必要としている日本語能力とはどのようなものかという疑問が生まれた。これが研究の出発点になり、まずインタビュー調査を実施して、一定期間の日本語学習を終えて伝道を行っている宣教師の声に耳を傾けた。さらに、実際の伝道活動を包括的に見ることを目的として教会の日曜礼拝でフィールドワークを行った。この二つの調査全体を質的調査による仮説生成の過程と捉えることができる。はじめに、仮説生成の過程を説明し、次にこのフィールドワークでの利点と制約について述べる。

3.1.2 仮説生成の過程

インタビュー調査では、9人の宣教師を対象として行った本調査³⁾ に先立って、2人の宣教師に、伝道において信者・未信者の日本人とコミュニケーションを行う中でどのようなことに問題を感じているかという点について予備調査をした。この質問への回答を分析した結果、日本語についてだけではなく伝道についても具体的に知る必要があると判断し、本調査では「伝道について/日本語について」という二つの項目を立てて、非指示的インタビューを行った。

データ 1

- a. 日本人の背景、アメリカ人の背景、みんなの個人的な背景も違いますから、
- b. 自分の信仰がはっきりしていないというのは大問題、
- c. プレインフォームを使うことが出来たら、もっと人と親しくなることが出来るんじゃないかなと思うんですよね。
- d. 言葉自体の意味が分かっても、何を言っているのか分かりません。
- e. もし問題があったら失敗したら、ちゃんとどういうふうに謝ったらいいのでしょうかとか（日本人に聞きます）

文字化されたデータからパターンを探するという分析の過程で、例えば、データ 1 の a. のような宣教師の声から、「伝道の異文化コミュニケーションとしての側面」が浮かび上がった。さらに、b. から「宣教師のクリスチャンとしてのアイデンティティ」、c. から「信頼関係」、d. から「伝道に必要な日本語」、e. から「問題解決の方法」などがキーとなる概念として得られた。このようなインタビュー調査では、宣教師の信念については明らかになるが、実際の行為に関しては捉えることができない。そこで、伝道を行う中での信者・未信者の日本人との相互作用を見るためにフィールドワークが計画された。

フィールドとインフォーマントを決定するために、いくつかの教会の礼拝やサマーキャンプに参加して、宣教師の働きと日本人とのコミュニケーションの様子を観察した。この参与観察を通して、どのようにフィールドに身を置くかを体験することができた。最終的に、外国人宣教師と日本人牧師がいる教会の日曜礼拝で参与観察をすることに決定し、1年10か月継続的に礼拝に出席して、フィールドワークを行った。インフォーマントは、外国人宣教師夫妻、日本人牧師、礼拝出席者である。

観察とインタビューによってデータを収集した。まず、フィールドの全体像をつかむために、礼拝全体の観察を行い記述した。そのフィールドノートや礼拝での録音の文字化資料を分析して問いを絞り込み、礼拝後の茶話会などでのやりとりに焦点を当ててさらに観察を行った。インタビューは非指示的インタビューで、インフォーマルなインタビューとあらかじめ約束をして行うインタビューを行った。録音できない場合は記述を行い、録音できた場合は文字化してデータとした。インタビューの内容についても、観察と同様に時間の経過につれて焦点が定まっていた。データ 2 は観察とインタビューから得られたデータである。

これらのデータは相互に関連がある。例えば、a. の日本人牧師と礼拝出席者の茶話会での会話を聞いて、記述したものが b. である。これは、日曜礼拝という

データ 2

- a. 牧 師：Fさん（礼拝出席者、男性）はまだ独身ですか。
Fさん：さっき話したんですけど、離婚した…（茶話会での会話から）
- b. （牧師は）プライバシーに属すると思われることをかなりはっきり言っている。Mさん（宣教師）はどう思っているのか。（フィールドノートから）
- c. 牧師、宣教師と一対一という関係じゃなくて、みんなが励まし合う、慰め合うという仲を作り、（宣教師へのインタビューから）
- d. Mさんは親身になって聞いてくれる、（礼拝参加者へのインフォーマルインタビューから）
- e. （Mさんは）文化を自分の方へ引き寄せている…言葉を信じちゃう…言葉では伝道できない。（牧師へのインタビューから）

文脈の中でのやりとりの意味を考えるきっかけになった。そして、宣教師へのインタビューでは、プライバシーに属すると思われることを話題にすることについて宣教師の考えを聞く中で、c. にあるように、教会についての認識が引き出された。これらのデータから「教会では信頼関係を築いて行くために自己開示が促されている」という仮説が生まれた。また、e. のようなデータはラポールがあるからこそ得られたデータであるが、調査者は、データの内容はそのインフォーマントの信念であって客観的な事実ではないということを心に留めて、観察にゆがみが生じないようにしなければならない。この日本人牧師の発言から、宣教師と宣教師を取り巻く日本人は、伝道という文脈の中でどのようなコミュニケーション観を持って言葉を使い行為を行っているのかを、観察とインタビューによって明らかにしていきたいと考えるようになった。

このように、観察と分析が交互に繰り返されてそこから仮説が生成されていく。恣意性を排した分析と解釈のための理論的枠組みの模索が続いている。

3.1.3 教会でのフィールドワークの利点と制約

調査者がデータを収集する媒体となる質的調査では、利点と制約は表裏一体であることが多い。日曜礼拝には一人の出席者として参加し、「完全な参与者」に近い状態でフィールドワークを行った。フィールドでの時間の経過とともにインフォーマントと自然な人間関係が形成されていった。

教会でのフィールドワークの利点は、教会という場がラポールを構築しやすい条件を持っているということである。しかし、これは同時にインフォーマントとの距離が近くなりすぎると観察者としての視点を維持することが難しくなるという点で、制約にもなった。

3.2 事例2：日本語補習現場でのフィールドワークの事例（吉田）

3.2.1 出発点

出発点は、公立の小・中学校で調査者が関わっている日本語補習⁴⁾の場での疑問である。なかなか上達しない児童・生徒がいる一方で、補習教室では学習しない表現をいつのまにか適切に使いこなすようになる児童・生徒がいる。何がこの差異の原因であるのか、上達する児童・生徒には何が刺激となっているのかは、補習担当者にとって大きな疑問であった。日本語の補習ボランティアである調査者は、この差異の原因として、補習教室や学校ではなく、家庭生活の中での日本語のリソースとしてテレビ視聴が影響しているのではないかという大まかな問いを立てた。

「子どもたちのテレビ視聴と日本語習得の関係」という問いは研究テーマとして漠然としており、より具体的なテーマを探る必要がある。テーマを絞り込む模索は調査方法の模索と並行して行われた。その模索の過程について報告する。

3.2.2 フィールドでの模索

1) 調査方法の模索

データ収集は、1999年6月から1999年9月の期間に行った。中学校で補習を担当した一人の生徒をインフォーマントとした。予備的な調査として、家庭で見ているテレビ番組やテレビ視聴の状況について、雑談の中でインフォーマルなインタビューを行いその内容を記述した。またインフォーマントに関する情報として、補習授業時に観察したことを授業後記述し、補習教室以外の場で会ったときの日本語の使用状況についても記述した。やりとりは、全て日本語である。調査については、本人には口頭で、また学校には文書で了解を得た。また、インフォーマントの小学校時代の補習メモも、小学校補習担当者の了承を得てコピーを入手した。これと並行して、テレビ視聴に関して認知科学的な文献の検索を試みた。しかし、「テレビを見る」という認知的な過程は複雑で、言語習得との関係を検証するのは容易ではないことがわかった。インフォーマントがテレビを見ているところを装置を使って観察する実験的な方法もある。しかし、これはテレビを見る状況として不自然であり、インフォーマントへの負担になると予想された。そこで、テレビ番組の内容や時間の長さではなく、テレビを見ることや見た内容がインフォーマントの生活にどのような影響があるのかについて調査を進めることにした。方法としては、生徒にとってできるだけ負担をかけず自然なデータを集める方法として、参与観察法とインタビュー法を用いた。

2) データ収集の行き詰まり

参与観察では、授業時に簡単な観察のメモを取って授業後に記述し、フィール

ドノーツを作成した。しかし、観察の初期には調査者のメモを取る行為に特に注意を払っていなかったインフォーマントが、次第に調査者のこうした行為を気にするようになっていった。

また、インフォーマルなインタビューを重ねていく中で、インフォーマントの複雑な家族背景について話を聞くことが多くなった。調査者として具体的なテレビ視聴状況を把握したいと考える一方で、補習担当者として生徒のプライバシーに立ち入ることに抵抗があり、葛藤が生じた。また、その家族背景を考慮すると、インフォーマントの保護者に調査継続の了承を得ることも難しいと判断し、インフォーマントの変更を決定した。

3) 新規調査

先の調査での反省を踏まえ 1999 年 10 月からの調査では、あらかじめインフォーマントの保護者にも了承を得た。補習授業時の雑談の中でのインフォーマルなインタビューや観察の内容を授業後記述した。会話は全て日本語である。また、日本語による日記を書くためのノートを渡し、テレビ視聴を含め生活の記録を依頼した。インフォーマントが新たに記述した部分を、補習時間後の休み時間にコピーしデータとした。

これらのデータから、インフォーマントのテレビ視聴の状況や生活態度を把握したうえで、テレビ視聴を含めた生活全般について非指示的インタビューを行った。インタビューは、本人と学校に依頼し、放課後に補習教室を借りて行われた。インフォーマントの了承を得て録音を行ったが、録音を拒絶された部分については、インタビュー後、記憶に基づきメモを取った。このインタビューで得たデータから、児童・生徒にとってテレビを見ることは、認知的な刺激になるばかりでなく、その内容を話題にすることが友人関係の維持に関わってくることを確認した。これを踏まえ、インフォーマントの友人である日本人中学生 2 名も加えた計 3 名を新たなインフォーマントとし、三人の交友関係や学校生活を中心にした話題で、グループインタビューを計画・実施した。インタビューは、インフォーマントたちの了承を得て録音し、文字化資料とした。文献検索と平行して、分析を試みている。

3.2.3 利点と制約

この調査では調査者が補習担当者としてフィールドの一員であったこと、すなわち「完全な参与者」であることが、調査の利点にもなり、制約にもなった。調査者は、インフォーマントである生徒との間に調査開始前から信頼関係が成立していた。このため、ラポールを構築する手続きを省略することができた。

しかし、観察の継続については、調査者としての立場とフィールドの一員とし

での立場で異なる見解を持った。結果として、フィールドの一員としての立場を優先させ、観察行為を抑制することになった。

3.3 事例3：海外で行ったインフォーマントが多様な調査の事例（岩崎）

3.3.1 出発点

出発点は海外派遣日本語教師⁵⁾であった報告者が、派遣国（以下a国）で日本語スピーチコンテストの運営に参画した経験の中にある。初回のスピーチコンテストで現地国人教師に審査員を依頼した日本人教師たちは、二回目のコンテストでは現地国人に審査を依頼することを止めた。a国の日本語教育環境という社会的コンテキストの中で、「二回目のコンテストで、日本人教師が現地国人教師を審査員から外したこと」は、どのような意味があるのかを探りたいと考えた。スピーチコンテストは社会的事象である。スピーチコンテスト自体と、そこに関わる多様な人々の相互関係・相互作用を社会的コンテキストの中で捉えるために、a国に滞在し、インタビュー調査と観察を行った。ここでは調査の概要を述べ、質的調査を行う上での利点とそれがデータ分析に与えた制約について報告する。

3.3.2 調査の概要

1) 調査の枠組み

- ①調査活動を行った場所：a国（b市、c市）
- ②集中的な調査活動を行った期間：1999年11月10日～12月9日の1ヶ月間
- ③インフォーマント：インフォーマントは、a国b市及びc市で催された日本語スピーチコンテストの関係者である。例として表1に、a国b市で行った調査の、インフォーマントの背景とインタビュー数をまとめた。

表1 インフォーマントの背景とインタビュー数（a国b市調査）

日本語教育要素	職業	国籍	コンテストで担う役割	インタビュー数	
日本語教師	公的機関派遣教師	日本人	運営者	11	
	民間機関派遣教師	日本人	観客	1	
	現地国教師	a国人	審査員	1	
学習者	大学生	a国人	—	16	
	民間日本語センターの学生		スピーカー	10	
非日本語教育関係	ODA(政府開発援助)関係者	日本人	観客	—	
	日本国大使館			審査員	1
	日本商工会			審査員	2
				1	

2) 調査の実態

①観察：b市及びc市で催されたスピーチコンテストに審査員として参加し、参与観察を行った。この経験を中心に、観察はa国滞在全期間を通じて行われた。前者は「積極的な参与者」としての観察であり、後者は「消極的な参与者」としての観察である。

例えばb市では調査者が滞在しているホテルへ電話をかけてきて、コンテストの準備状況やa国人教師のコンテストへの協力の有無等について、細かく説明する日本人教師もいた。そのような場合は、電話の横にノートを置いて話の内容を書き付けた。またコンテスト前日の最後の運営ミーティングでは、スタッフとして働く学生へ御礼に渡す文房具を、隣のテーブルで包装する手伝いをしながら日本人教師たちの議論を聞いた。インフォーマントと積極的に食事・行動を共にし、会話に加わりながら人間関係を観察した。これらの会話・観察は、インタビューを補完し、また理解を助ける情報を提供してくれた。

スピーチコンテスト当日は、審査に参加する一方、審査員席や控え室で交わされる他の審査員同士の会話に耳を傾け、パンフレットの余白にメモを取った。懇親会ではインフォーマントに、コンテスト直後の感想を聞く一方、正式なインタビューの依頼をした。

②非指示的インタビュー（b市調査の場合）：43名のインフォーマントの大半と1996-98年より面識があり、インタビューの約束は容易に取れた。

日本人教師には、日本出国前に電子メール・手紙で、インタビューの依頼をした。a国人教師には、調査依頼の書類（研究目的と調査方法を明記した調査協力依頼書）を作成し、日本人教師経由で手渡してもらった。学習者及び審査員には、コンテスト後に催された懇親会の席で依頼し、全員に快諾を得た。

インタビューの場所と時間はインフォーマントの都合を優先した。適当な場所をインフォーマントが知らない場合は、調査者が滞在するホテル（中心街にあり、インフォーマントの住居・勤務先・日本語を学ぶ場所から近い。a国人向けの小ホテルで、部屋には小さな応接セットがある。朝食用のダイニングルームを貸して貰うことも可能であった。）に来てもらった。

なお、インタビューは1～2時間程度の長さであり、会話はすべて日本語で行われた。許可を得たインタビュー（95%）の内容をMD録音した。そのうえメモも必ず取った。「メモを取る」という行為はインフォーマントに、「その話題は興味深い」という信号を送り、会話が深くなる。また多様な背景を持つインフォーマントは、その価値観・経験も多様である。在外公館で行ったインタビューも、道脇に並ぶ茶店で行ったインタビューでのインフォーマントの発言も、同等に尊重し関心を持って聞いた。

③調査後

公務員を除くインタビュー協力者全員に、小さな謝礼（テレホンカードや和風小物）を渡した。また日本へ帰国した後、感謝の気持ちを伝えるカードを全員に送付した。

3.3.3 利点と制約

3.3.2 で述べた調査は、海外で行った質的調査である。またスピーチコンテストという社会事象を研究対象としたため、インフォーマントが多様である。しかし、海外派遣教師が元派遣国で行った調査であるため、日本人インフォーマントとの間には海外日本人社会における緊密な人間関係が、a 国人インフォーマントとの間には日本語教育/学習を仲立ちとする共通の目的を持った人間関係が、調査開始前に構築されていた。つまりラポールが形成されていた。このような条件が与えた影響を、質的調査を行う上での利点とそれがデータ分析に与えた制約という観点から表2にまとめた。

表2 海外派遣教師が元派遣地で行った質的調査の利点と、それがデータ分析に与えた制約

	キーワード	利点	制約
非指示的インタビュー	フィールドが遠いことと インタビュー密度	話し易い相手	倫理観
参与観察・観察	時間の限定	現場の尊重	検証の精度

海外調査であるため、調査者が現地に滞在する期間を除き、フィールド/インフォーマントと調査者の間には物理的な距離がある。これは非指示的インタビューで利点となった。調査者はインフォーマントにとって、「話し易い相手」になる条件を備えている。その条件とは、フィールドの事情を理解していて話が通じる、フィールドでは短期滞在者であり当地での人間関係への影響が少ない、という二点である。その結果、密度の高いインタビューデータを得ることができた。しかし、率直な会話は複雑な人間関係を内包する。文字化した録音資料を分析する中で、インフォーマント間及び調査者とインフォーマントとの間の人間関係に影響を与える可能性が潜在する情報をどう扱ったらよいのか、という倫理上の問題が生じてきた。

また、海外調査であるため、調査時間が限られている。フィールドに留まる時間が少ないことは、部外者の存在がフィールドに与える影響を抑えることを意味する。しかしその反面、時間が限定された調査であるため、観察したこととインタビューによって知り得たことの差異について判断するのに、困難を生じる場合

があった。

データ3

調査者の質問：「なぜ a 国人教師たちは審査に対して不満を持ったのかなあ。」

- a. …審査結果を発表して a 国人教師たちは「え、ちょっと話が違うんじゃない」ってことになって、つまり事前の説明がうまくいっていない…
- b. あの時2位をもらった女の子が、原稿持って壇上に上がったんですよ
- c. …採点結果を結局、審査員だけで確認する時間がなかった、いきなりもう…
- d. Eric 先生（仮名）は自分の学生が賞を取れなかったことで怒っている…
- e. （日本人審査員の一部が）現地のことを知らないことが皆にわかってしまうような質問をしていましたよね。…そういう質問をされるっていうのは（a 国人にとって）許せない…

例として非指示的インタビュー調査から得たデータ3があげられる。データからは、インフォーマントが他のインフォーマントや状況に不満を持っている様子がわかる。また共通の体験が同じ経験として認識されていない上、発言内容は観察された状況やインフォーマントの行動と必ずしも一致していなかった。このようなインフォーマントの意識・行動及び意識と行動の差異、そしてインフォーマント間の認識の相違は、インフォーマント個人を理解しその相互関係とそれらの相互作用、日本語教育への影響を探るデータとして興味深い。しかし、扱いは制約が多く分析に困難を生じる場合があった。

4. おわりに

三人の日本語教師は、教育の場で感じた疑問を出発点として、教室の外の学習者や学習者を取り巻く現象に焦点を当てて調査・研究を試みた。調査の手法として、質的調査法であるインタビュー法や参与観察法を用いた。調査を進める過程で初期の疑問は調査の問いになり、調査者のフィールドに対する認識にも変化が生じた。事例1では、外国人宣教師を対象としたインタビュー調査と教会の日曜礼拝での参与観察を仮説生成の過程に焦点をあてて報告した。事例2では、公立小・中学校の日本語補習現場での調査方法の模索について報告した。事例3では、海外で行った、インフォーマントが多様な調査の概要を述べ調査の利点がデータ分析に与えた制約を報告した。調査を行う上では、調査者とインフォーマントとの間やインフォーマント間の人間関係が大きな課題である。どの事例でも、人間関係は調査の利点とも制約ともなっている。

今後も調査方法、研究倫理、調査者とインフォーマントとの関係のあり方について模索しながら、日本語教育への貢献につながる調査・研究を続けて行きた

い。

注

- 1) 主にインテンシブなインタビューや参与観察のような余り定型化されない方法でデータを集め、その結果の報告に際しては、数値による記述や統計的な分析というよりは言葉による記述と分析を中心とする調査法（佐藤 1992）。
- 2) キリスト教プロテスタントの宣教師
- 3) 今井美登里。（2000）「外国人宣教師の日本における伝道と日本語学習—9人の宣教師へのインタビューから—」『日本語教育論集』16，国立国語研究所日本語教育センター，pp.47-64
- 4) 平成11年9月1日現在、日本の小・中学校に在籍している外国人児童・生徒の数は17,633人である。外国人児童・生徒の円滑な学校生活のために、日本語の補習を目的とした取り出し授業などが行われている。取り出し授業を受けているのは14,497人である（文部省2000年6月による）。調査者の関わっていた取り出し授業は日本語補習と呼ばれ、学校側の担当者とボランティアグループのメンバーが分担して、グループやマンツーマンでの学習を行っていた。
- 5) 国際交流基金調査（1998）によると、海外日本語学習者数は約210万人ほどであり、海外で日本語を教える教師の約3割が日本語母語話者である。

参考文献

- 岩永雅也，大塚雄作，高橋一男。（1996）『社会調査の基礎』放送大学教育振興会。
- 遠藤雄三，宝月誠，訳。（1997）（J. コランド，L. ロランド，1995）『社会状況の分析 質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣。
- 北澤毅，古賀正義，編著。（1998）『〈社会〉を読み解く技法』福村出版。
- 木下康仁。（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂。
- 後藤隆 他，訳。（1996）（B.G.グレイサー，A.L.ストラウス，1967）『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社。
- 佐藤郁哉。（1992）『フィールドワーカー書を持って街に出よう』新曜社。
- 佐藤郁哉，好井裕明，山田富秋，訳。（1998）（R. エマーソン，R. フレッツ，L. ショウ，1995）『方法としてのフィールドノート』新曜社。
- 志水宏吉，編著。（1998）『教育のエスノグラフィー 学校現場のいま』嗚峨野書院。
- 土屋武久，森田彰，星美季，狩野紀子，訳。（2001）（H.W. セリガー，E. ショハミ，1989）『外国語教育リサーチマニュアル』大修館。
- 平山満義，編著。（1997）『質的研究法による授業研究 教育学 教育工学 心理学からのアプローチ』北大路書房。
- 箕浦康子，編著。（1999）『フィールドワークの技法と実際—マイクロエスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房。
- 森川涉，訳。（1999）（ジョン・ヴァン＝マーネン，1988）『フィールドワークの物語』現代書館。
- 横田澄司。（1977）『深層面接法』新評論。
- 好井祐明，桜井厚，編。（2000）『フィールドワークの経験』せりか書房。
- Nunan, David. (1992) *Research Methods in Language Learning*. Cambridge University Press.

(* 1 モハメド5世大学 * 2 JMLI 日本語学校 * 3 (財)日本国際協力センター 筑波支所)